

ウルリム  
響

# 星 環

特定非営利活動法人

聖公会生野センター機関誌

第40号

2006年8月20日発行

題字：康秀峰

URL <http://www.nskk.org/province/ikuno>

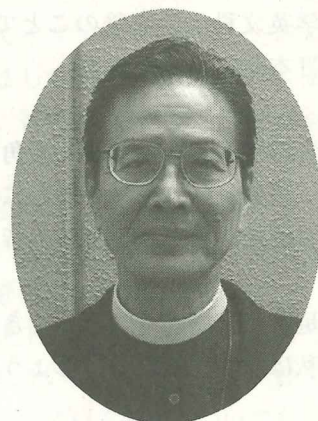
E-mail: [ikuno@nskk.org](mailto:ikuno@nskk.org)

## 韓国との接点・原点・生野センター

堀尾憲孝

私は、昨年宮崎県の延岡の地にある教会の兼任牧師として、隔週おきに、福岡県の小倉から大分県の山中を通過して250キロの道のりを凡そ5時間半かけて出かけています。余りにも遠い教会ですが、何故か人が心配して下さる程は疲れないのです。道中の景色が美しいというばかりでなく、かつて定住牧師としてこの教会で仕えた1974年からの7年間という歳月がとて尊く大切な日々だったからなのです。その教会に再び今度は兼任ではあるものの牧師として仕えることができるのは喜び以外の何ものでもないからなのです。この年、九州教区は大韓聖公会大田教区と姉妹教区関係に入り、1976年に蘇永弼司祭が協働司祭として一年間来られました。その内の4ヵ月間、礼拝出席12~3名ぐらいの小さな延岡の教会に滞在していただき協働牧会をしたのです。教会では早速、近隣教会の信徒や市民に門戸を開いた「韓国語講座」と「韓国伝統文化講座」を開設し、短期間ながら蘇司祭は情熱と叡智を注がれました。1977年夏帰任後、開拓伝道で経済的に苦悩しておられた彼を支えよ

うという声が期せずして起こり、小さな教会がその年の秋から丸一年間毎月5万円を送り支えたのです。そして支援が終わった1978年の秋に、私は妻と就学する娘と4歳の息子を伴って、全州聖公会の協働牧師として派遣されたのです。特記すべきことは、いと小さき延岡の教会が牧師家族を喜んで送り出したことです。決して、何もしないことの言い訳として己が弱さを言い募ったりしなかったことです。弱さの内にこそ神の力は働くという御言葉を延岡教会は見事に体現してくれたのです。私は、その思いに応えようと出港する関釜フェリーの中で「全州通信」と名付けた手紙を書き始め、1年後の帰国時、釜山に戒厳令がしかれた日まで書き送りました。昨年5月、26年ぶりに全州を訪れた私を故・蘇司祭の薫陶を受けた当時学生だった司祭や信徒が、みずから小さな教会であるにも関わらず、地域社会に使えることを宣教の使命とした「分かち合いの家(ナヌメチップ)」を立ち上げ活躍している姿にこみ上げるものを押さえきれませんでした。その事は私にとってのとても大切なことです。聖公会生野センターが「分かち合いの家」のような宣教の現場としてこれからも働かれることを遠く九州から祈っております。



### もくじ

韓国との接点・原点・生野センター/1
時のしるし 「白い影」——尹東柱 日本最初の詩/2
多民族・多文化共生のすすめ⑩ 中東と極東=この差異はどこから?=/3
「聖公会生野センターをサポートしよう」を終えて/4
韓国からのお便り② 病氣と嫌韓流/5
写真 聖公会生野センター フォトギャラリー/6・7
こんな本あります⑥ 『(在日) 文学全集』/8
詩「通名—— 日帝政策の創氏改名を起源とする」/9
編集委員リレーエッセイ・読者の声から・余韻/10

(ほりお のりたか

司祭・小倉インマヌエル教会 牧師)

今から63年前の夏、1943年7月14日、尹東柱は京都市左京区田中高原町の下宿で逮捕されました。翌年3月31日、京都地方裁判所は彼を有罪とし、懲役2年の刑を課しました。福岡刑務所に投獄された彼の魂は、しかしそれから1年も経たないうちに、体を厳冬の独房に残して故郷に帰ったのでした。

尹東柱が日本に来たのは1942年春。日本での最初の詩とされるのは「白い影」です。立教大学英文科入学直後のことです。直訳に近い形で日本語にしてみます。

黄昏が濃くなってゆく街角で  
一日中、疲れた耳を静かに傾ければ  
夕闇の、移される足跡の音

足跡の音を聴くことができるように  
私は聡明だったのでしょうか。

いま愚かにもすべてのことを悟った次に  
長く心の奥深くに  
苦しんでいた多くの私を  
ひとつ、ふたつ、私のふるさとへ送り返せば  
街角の闇の中へ  
音もなく消えゆく白い影、

白い影たち  
ずっと愛していた白い影たち、

私のすべてのものを送り返した後  
うつろに裏通りをめぐり  
黄昏のように色づく私の部屋へ帰ってくれば

信念の深い堂々たる羊のように  
一日中憂いなく草でもはもう

「足跡の音」というのはほんとうに直訳です。日本語としては奇妙でしょう。三つの邦訳を見ましたが皆「足音」と訳しています。しかし私は「足跡」を残したい。足跡は過去の出来事の痕跡なのです。しかしその痕跡に触れるとき、

はっきり音が聞こえるのです。イエスさまと人々の足音を聞くことができるほどに、尹東柱は聡明にされた（神によって）のではないのでしょうか。彼には神さまから託された使命がありました。それですから、みずから聡明だと思っても、それはおごりや高ぶりではなく、不思議なことをなされる神への控えめなつよきなのです。

しかしそのような目と耳を持った彼には、時代の闇がはっきりと見え、悪が命を押しつぶす音がはっきりと聞こえました。そのような彼の存在は、闇にとっては忌まわしいものでした。「黄昏のように色づく私の部屋」に闇の力は押し入り、やがて彼を抹殺しました。治安維持法違反。自分の言葉で詩を書き語り合うことが、「国体ヲ変革スルコトヲ目的トシテ」協議や相談をしたことだということです。

今年6月23日、京都に尹東柱の第二の詩碑が建てられ、その除幕式が行われました。左京区田中高原町の彼の下宿跡、現在の京都造形芸術大学高原校舎です。尹東柱の妹、尹恵媛さんが挨拶されました。兄のことを「オッパ」（妹が兄を呼ぶ言葉）と呼ばれた優しい音の響きが耳に残っています。

政府・自民党は「共謀罪」成立を図っています。政府や警察から見て「良からぬこと」を相談・協議しただけで逮捕できる恐ろしい法案。治安維持法の再来と言うべきものです。

神に守られ、かつ主体性を持った「信念の深い堂々たる羊のように」しっかり存在しつつ、課題に取り組むことを彼は促してくれます。

（いだ いずみ 京都聖三一教会牧師）



尹東柱の碑と妹の尹恵媛さん

「白い影」  
尹東柱  
日本最初の詩

井田泉

## 中東と極東 = この差異はどこから？ =

金光敏

イスラム・シーア派の武装組織「ヒズボラ」に兵士2名が拉致されたとして、イスラエルがレバノンを攻撃、民間人を含め230名（7月18日現在）、その反撃を受けたイスラエルにおいても20名を超える犠牲者が出た。また、戦闘に危機を抱いたシリアは、自国領土をイスラエルが犯した場合、全面的に対抗すると宣言した。

おりしも、主要国サミットが、中東で事態が深刻化する最中に行われたが、イスラエルに対し、攻撃の自制すら呼びかけることができなかった。17日に開かれた国連安全保障理事会の非公式協議では、アラブ諸国から議長声明での停戦の呼びかけを求めたが、これも実現しなかった。英国とアナン国連事務総長は、事態沈静化に向け国際部隊を提案したが、これもやはり実現のめどは立たない。

戦火が広がる中東に対し、国際社会の懸念は日増しに高まっているが、イスラエルは攻撃を止めようとはせず、民間人犠牲者は増える一途であり、血の応酬はイスラエルにおいても犠牲者を広げている。どうして北朝鮮のミサイル発射を国際的脅威だとして非難した国連安全保障理事会と主要国サミットが、イスラエルに対し攻撃を止めよと言えないのか。

国際社会は、これ以上事態を放置すれば本格戦争に突入すると懸念しており、特にイスラム教徒が多いヨーロッパでは、自国の平和と安全につながる問題であることから、中東情勢に一喜一憂している。いやこの事実上の中東戦争状態に、世界の不安定さが一気に加速すると世界中は恐れている。

ところで、国際社会の停戦、和平への動きを一体誰が躊躇させているのか？もちろん、アメリカだ。最新鋭の武器が米国から供与され、中東で圧倒的な軍力を持つイスラエル。パレスチナに対する侵略行為はもちろん、近隣の国々に対し、どんなに無法を犯しても、国際社会から制裁を受けることはない。すべてその動きをアメリカが未然に握りつぶす。

私は、パレスチナとイスラエルならば、パレスチナの側に立つ。今回のヒズボラとイスラエルの武力衝突を考える時、私はヒズボラの肩を持つ気にはなれないと同時に、イスラエルについては強く強く非難する。

イスラエルのレバノンに対する攻撃は、民間人をねらった戦闘行為であり、虐殺であるからだ。

主要国サミットに先立ち、小泉首相は中東を訪問し、イスラエル首脳とも会談した。この時、すでにイスラエルによるパレスチナ自治区の侵略が始まっており、小泉首相がイスラエルに毅然たる態度で自制を求め、仲裁を買って出る平和外交を展開すべきだった。中東諸国は、この時期にあえてイスラエルを訪問した小泉首相に期待したはずだ。ましてや北朝鮮のミサイル発射を平和の脅威と糾弾し、恒久平和を希求する憲法を持つ国なのだから。

国際社会に欠落しているのは、非軍事に向けた努力だ。片方の暴力には悪意の無関心を貫き、もう片方の軍事には、血相を変えて非難だ、制裁だと叫ぶ。

わが半分は祖国、朝鮮民主主義人民共和国のあり方に到底賛同する気にはなれないが、しかし、北朝鮮が巧みに国際社会の矛盾を突いている事実についても目を向けなければならない。今回のミサイル発射に対する北朝鮮の主張は、世界中の国々がミサイル発射訓練をしており、列強は弾道ミサイルを保有している。日本やアメリカなどのミサイル訓練に際して、一度たりとも北朝鮮に事前通告してきたかというものだ。すなわち、「なぜ北朝鮮ならだめなのか」という主張である。

私たちは、北朝鮮の危ない賭けを批判する立場で、ミサイル、核開発に反対する立場で、同時に日本はもちろん世界の軍縮と非核化を進めなければならない。そこに不平等はありえない。

今夜も、戦禍に絶命していく子どもたちを尻目に過ごす。象徴的な夜。レバノンで二百数十名、イスラエルで二十数名、津波によるインドネシアの犠牲者は千名に達するとともに。その日の報道ステーションのトップの話題が天皇の次男夫人の妊娠状態であり、その次が王貞治ソフトバンクホークス監督の胃癌摘出手術成功であった。これで30分を費やした。

やはり私たちの前には、厳格に、人命の「重い」と「軽い」がある。

（きむくあんみん コリアNGOセンター事務局長）



## 「聖公会生野センターをサポートしよう」を終えて

佐藤耕一

「男性はとかく効率や実績 (doing) に拘るが、これからは女性の、そして主イエス・キリストの“共にいる” (being) をもっと大切にしよう。そうすれば聖公会生野センターをどのようにサポートしたらいいのか、その道筋は見えてくるはずだ」。宇野徹聖公会生野センター理事長 (大阪教区主教) が総括と勧めの中で言われた言葉がとても衝撃的でした。何十年も実業社会で働いてきているわたしたち男性は、発想自体が企業的、画一的になってしまっているのだろうか、“共にいる”ことを忘れてしまっているのだろうか、これでは本当のサポートは難しいかもしれない、と我が身を振り返って反省させられました。

梅雨の合間の快晴に恵まれた7月15日、一日修養会は約70人のみなさんに出席していただき、聖公会生野センターでスタートしました。今回の修養会のテーマは、私たちの大阪教区が深く関わっている、しかもすぐ身近にある、生野センターについて知らない人や関わりを避けている人が教区内に意外に多いことに注目して選定したものです。とにかく生野センターについてまず知ってもらうことが出発点であり、知っていただいた後、何をどうサポートすればいいのか、を話し合っていく方法が良いと考えたのです。

オリエンテーションと、生野センター主催のクリンもだん美術教室の大澤辰男先生から教室の話



パネルディスカッションでの討論

をうかがった後、住民の過半数が在日韓国・朝鮮人であるコリアタウンを見学しました。市場では「ここは韓国ではないか」と思うような原色に満ちた食品や民族衣装に心をときめかしながら、在日の人たちの80年を越える歴史の重みを噛みしめながら地域を歩きました。7月半ばの暑い中にもかかわらず充実した地域見学であったと思います。

地域見学後に大阪城南キリスト教会で始まったパネルディスカッションは、大体予定どおりに進行しました。特にパネリストとして参加された生野センターの呉光現兄の、実践に裏付けられた説明は説得力があったと思います。事後のアンケートでは、「聖公会生野センターの目的や活動についてよく理解できましたか」という質問に対して、提出者32人のうちの29人が、「理解できた」と回答されています。また、「サポート出来そうですか」という設問には、とても無理である、と答えた方は6人で、あとの方はいろいろなサポートの種類をそれぞれ選択されています。

また、今回は第2部として自分たちで買い出し、調理して教会で韓国料理に舌鼓しながら楽しい一時をもてたことは感謝に堪えません。

以上の結果を単純に喜んでばかりはいられませんが、この修養会で得たものを大切に各教会で話し合いの機会を持ち、ゆっくりであっても着実に前進していきたいと考えています。また生野センターの関係のみなさまの、私たちに対する働きかけももっと強めていただき、共に考え共に祈る機会も増やしたいと思います。冒頭の“共にいる”をあらためて心に刻んで、“doing”と“being”の両方にベテラン男性の賜物が発揮できるように願っています。

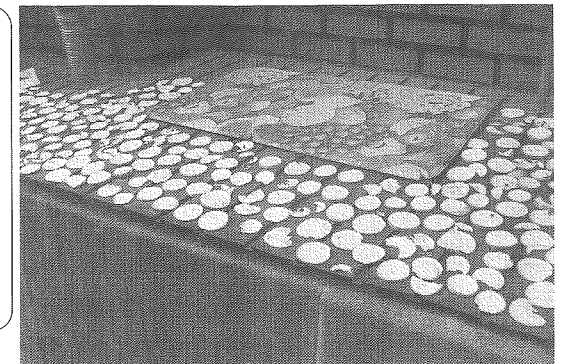
(大阪教区連合男子会修養会実行委員長・  
芦屋聖マルコ教会 さとう こういち)

## 病 気 と 嫌 韓 流

中村 香

一人は病気の犠牲者になるのではない、永遠の意識である、より高い存在が私たちの意識に話しかける唯一の手段が肉体なのだ、と。健康の衰えは、身辺を見つめ直して自分が繕う必要のある重大な傷を分析するための合図だ。その傷とは人間関係、揺らいで穴の開いた信念、出口のない恐怖、私たちの造り主にたいする不信、人を許せない頑な心などだ。 —

『ミュタント・メッセージ』 マルロ・モーガン



ソウルの民家の玄関先で干してあった輪切りのカボチャ=何の料理に使うのだろうか?

というわけで病気になった。5年前からあった病気が子宮内膜症という。命に別状はないかわりにと言っただけで、手術が必要な上に完治はしない。手術の予約をし、全ての検査を終え、あとは入院を待つばかり、となった2日前に手術を延期することにした。3ヵ月、韓薬 (韓方の薬) での根本治療を選んだのである。

それからというもの、ずっと家で休養しながら (イエイ?)、今までの自分、身体のこと、生活のことを考えた。

韓国へ興味をもった最初のきっかけは、8年前、沖縄で開かれた聖公会の韓日青年キャンプでの韓国人との出会いと、「違い」の衝撃的な発見であった。例えば、真夜中まで続くキムチと辛ラーメンとソジュ (焼酎)。情熱的なしゃべり方と濃厚なスキンシップ。ご飯を食べる時のあぐら。日本で生まれ育った私は様々な教育、ルールの中で「絶対」なるものがあったが、それがガラガラと音をたてて崩れていった。韓国に留学してからも日本との「違い」を発見するたびに愉快になり、心が軽くなるようだった。

それが結婚して韓国に住むとなると、その「違い」に不満がついてきた。日本のように厳密に順番を並べないこと。電車バスの中、携帯電話で大声でしゃべっていること。ソウルの人口密度が高いのも荷担して人がドカンドカぶつかってくる。日本のような人間関係が作れないこと。儒教的な文化や様々なしきたり。小さなこと一つ一つに敏感に反応し、イライラしている。しまいにはキムチを食べている鳩にまで「それまで食うか! 豆食え豆をー!」と実際につっこんでしまい、自分の異常さに気付いた。

「絶対」なるものの代表選手として日本では“人に迷惑をかけない”というルールがあげられる。

ある日、ソウルの地下鉄の中で子どもがウロウロ歩

き回っていた。私は「迷惑やなー」と不快に思った。韓国人である夫は隣で本を読んでいる。「ねえ、あんな子見てなんも思わへんの?」と聞いてみた。夫はその子をジーっと見て、「でもうるさくしてないし、人におつかってないから迷惑ではないんじゃない?」。ハッと思い周りを見回すと、誰も全く気にしていないのである。その子の行為を迷惑に値するものとし、不快を感じるようにしむけていたのは私自身であった。

また、韓国が日本に対して戦争責任の問題、首相の靖国神社参拝、独島・竹島をとりあげて日本を非難する時、直接に何かを言われる時、それは謹んで受けるが、段々と自分が否定されているような気分になっていったのである。そして陥る自己嫌悪。しまいには逆ギレして「日本のことばかり文句言ってるけど韓国はどうなのよ!」とすごくいじわるな気分になるのである。最近「嫌韓流」という言葉が聞かれるようになったが、その発端と、自分の気持ちは似たようなものがあるのを見失ってしまい、いよいよ否定できなくなってしまった。

物事の善悪に関わらず、「感じる」のは自分である。ストレスとは受けるものではなく、固定概念によって自分が作り出したものであったのだ。

固定概念やルールを捨て、まっさらな道を歩きなさい、ということだと思う。それで私は韓国に来たのかもしれない。どこに住んでいようと、自国の伝統や文化、受けて来た教育やルールは、再認識されなければならない。新しい意識を持つことが、身体と心の、また韓国と日本の、「癒し」につながることもかもしれない、と思う今日のこの頃である。

(なかむら かおり ソウル在住)

### 楽しく学ぼう韓国語

### 聖公会生野センターで韓国語を教えるということ



関 淳奎先生

日本に来てずいぶん長い間、韓国語を教えることで、いわゆる生計を立てている。正規の大学もあれば、二、三人規模の小ぢんまりしたところもあった。最初は韓国語がどのような言語なのかでさえろくに知らないまま、ただ韓国語が出来て(母語話者だから当然であるが)、言語(日本語)を専攻している学部生ということだけで簡単にやらせてもらった。安易にはじめただけ苦労も多かった。今思えばそのときの能力の無さに、出来ないことへの悔しさがずいぶん良い薬となった。

大阪に来て大学院でことばの勉強も自分なりに深まり、韓国語教師歴もずいぶん(それでも4年ちょっとだったのかな)長くなったと自負していた頃、生野センターで韓国語の上級コースの先生をやってみないかという誘いが同僚の研究者からあった。迷った。上級の経験が皆無だったし、前任の先生がまた素晴らしい先生であったのでずいぶん悩んだ。

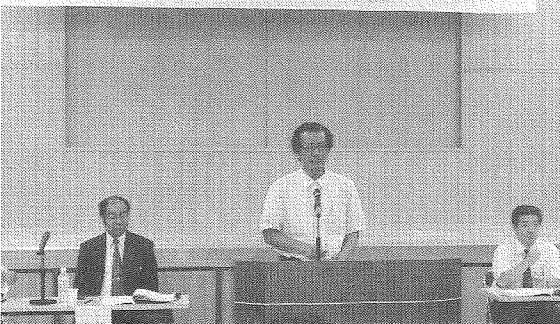
それからずいぶんと四年目に突入した。しかも上級コースだけで。今は私の生活の深いところに生野センターでの生活が根を下ろしている。授業での鋭く怖い質問だけでなく、授業後の毎週のように行われる反省会(周りからみると毎週飲むために集まるとも言われているらしい)は学業と論文だけであった私に新鮮な活力を与えてくれた。

何かを教えることはずいぶんストレスのたまる仕事である。しかし、知らないことを知らないと教えてくれるいい仕事でもある。なぜなら生半可な知識は許されないからである。それに学生の皆さんは一方的に私の韓国語の生徒さんであるだけでなく、いまやよきパートナーなのである。

私にとって生野センターで韓国語を教えるということは、ただ単に韓国語を教えることではない。勿論、ただただ生計を立てている手段でもない。同じ問題を共有する仲間と出会い、大きく笑い、その中でもがき苦しむ場である。(みん すんぎゅ 研究クラス講師)

### 生野地域福祉アクションプラン発表会

### 生野区地域福祉アクションプラン発表会



2年かけて策定した「生野地域福祉アクションプラン」の発表会が7月21日、生野区役所の講堂にて開催。在日韓国朝鮮人・外国籍部会の部長だった呉光現センター総主事が「在日のプラン」を発表

## 聖公会 生野センター



### 国際交流

### 分かち合いの家中高生、センターで研修



生野・東大朝鮮中級学校にて

大韓聖公会分かち合いの家の「幸せなわが家」に滞在している中高生とスタッフが8月2日～5日までセンターに滞在し、在日高齢者、障害者・民族学校訪問等、積極的な研修をおこないました。(分かち合いの家は大韓聖公会が運営する社会宣教を主な使命とする教会の機関です。聖公会生野センターは1992年の開設以来交流を続けています)



生野・天使の園保育園児とともに

### Watch! ワオッチ

## アートで自分を表現

受講生20人のうち15人が障害者

大津市生野区に障害者や在日外国人など、さまざまな立場の人たちが集う「ワオッチ」が、8月1日(土)に開催された。今回は「アートで自分を表現」をテーマに、20人の受講生が参加した。

講師は、大阪府立芸術文化センターの講師、中村一恵さん。中村さんは、障害者や在日外国人など、さまざまな立場の人たちが集う「ワオッチ」の運営に力を入れている。今回は、受講生が各自のペースで、思い思いに制作に取り組む受講生たち。

### 可能性に挑む「主役の場」

ソウルでの写生大会を契機に毎日新聞に大きく報道されました。

「主役の場」は、障害者や在日外国人など、さまざまな立場の人たちが集う「ワオッチ」の運営に力を入れている。今回は、受講生が各自のペースで、思い思いに制作に取り組む受講生たち。

### クリンもだん美術教室

7月30日の日曜日の午後、新進気鋭のぬいぐるみ作家、衣田雅幸さんを招いて、特別授業を持ちました。2時間の予定が3時間近くあったという間の1日でした。いつもは受講生だけで行っている授業ですが、今回はさながら「親子教室」の空気が漂う楽しい授業だったと思います。将来の商品化に向けて小さなヒントを得て一歩前進した気がします。(お知らせ クリンもだん美術教室が読売新聞の衛星放送のニュースで放映されました。当面、インターネットで見れます。是非ともご覧ください。インターネットホームアドレス <http://osaka.yomiuri.co.jp/indexx.htm>)

### クリンもだん美術教室

衣田先生

(6月22日 大阪版)



## 『〈在日〉文学全集』

### 磯貝 治良

待望の全集が6月に一挙刊行されました。勉強出版の『〈在日〉文学全集』全18巻です。これを紹介するにはちょっと気が引けます。私自身が編者になっていて宣伝っぽくなること。全巻セット売り94,500円と高価なうえ分売をしていないこと。個人購読には公費などを活用できる人を除くと、よほどの関心と経済条件が求められます。そこで皆さんにお願いしているのは図書館や大学などへのリクエストです。これはかなり効果を挙げているようです。

そんな厄介な本をこの欄で取り上げるのは、解放後=戦後60年にして初めて実現した、在日朝鮮人文学の画期的な集成だからです。

まず全18巻（1巻が400～500頁）の内容を簡単に紹介します。一人1巻の作家は金達寿、許南麒、金石範、李恢成、金時鐘、金鶴泳、梁石日、李良枝の8人。二名ないし三名で1巻の作家が金泰生、鄭承博、玄月、金蒼生、金史良、張赫宙、高史明、李起昇、朴重鎬、元秀一、金重明、金在甫、深沢夏衣、金真須美、鷺沢萌で第9巻～14巻。第15巻～16巻は14巻までに入っていない作家13名の中短編も含めた作品集。第17巻～18巻が19名の詩人の詩歌を取めた詩歌集。54名の作家・詩歌人の600余編の作品が収められています。版元からは全集の構成を一望できるパンフレットが出ていて、それを眺めるだけでもなかなか壮観です。

在日朝鮮人文学は、芥川賞、直木賞などの受賞者を輩出してきたことを除いても、日本語文学界において屹立してきました。むしろ文壇とは関係なく、書かすにはいられない強い衝動にせかされて書かれた作品が、〈在日〉文学の脈をなしてきたといえます。しかし残念なことに、それらの多くは読者の目にふれること少なく、忘れ去られ、正当に評価されずにきました。

全集の編者を依頼されたとき、わたしが二つ返事で引き受けた理由は、一つにはそれらの作品に

あらためて陽の目が当てられる、と思ったからです。二つめには、〈在日〉文学という「もうひとつの日本語文学」が集成されることによって、日本語文学一般のなかに埋没することなく、その独自の意味と全体像を提出できると思ったからです。

そして、編者の仕事をすすめる過程でもっとも強く思ったのは、変な言い方かもしれませんが、文学をめぐる「戦後責任」を果たすということです。

在日朝鮮人文学は〈在日〉の身世と差別に加えて植民地体験、解放後の民族の歴史と命運など、大きな物語を背負って苦闘してきました。それは人間の解放を求めるたたかいかでもあります。その主題の大きさ・重みは日本文学とは明らかに異なる、現代文学の独自性を形成しています。

独自性を如実に示しているのが日本語文体です。近代国民国家を形成する過程で日本語は帝国言語となり、植民地に対してのみではなくアジア全域に対して侵略言語として機能しました。しかし、在日朝鮮人文学は帝国=侵略言語に対して従順ではない日本語文体を切り拓いてきました。わたしたち読者は全集によってそのことをあらためて発見するでしょう。

在日朝鮮人文学は新しい世代の登場によって様変わりしつつありますが、全集からは文学の変遷だけでなく〈在日〉社会の変遷をも俯瞰できます。そのことは〈在日〉の歴史を再確認するためではなく、〈これから〉を考えるうえで役立つはずで

す。〈在日〉文学はいま、その独自性ゆえに普遍と世界に向かう折り返しの途上にあるようです。

■勉強出版連絡先：TEL03-5215-9021  
FAX03-5215-9025

(いそがい じろう 在日朝鮮人作家を読む会代表)

## 通名

### 日帝政策の創氏改名を起源とする

#### 丁章

まるで収容所  
今なお隔離される自民族らしさ  
追いやられる側にも  
追いやられる側にも  
もつともらしい声がある  
囲いの中では  
心地よさげに自民族らしさがやせ細る  
民族名はいずれ  
安楽死に見せかけられた他殺体となり果てる  
おびただしい数の亡骸と共に  
為すすべもなく横たわっていることの  
残酷な日々営み

意外にも門は開放たれている  
少なくない勇者に幾度となく打ち破られて  
すでに閉ざせなくなってもう久しい  
時を経て朽ちゆく自民族らしさを  
生かすも殺すも  
一歩踏み出してゆく勇氣  
通名を抜け出せば  
その先に必ずある人間らしさとの出逢い

丁章 (ちよん・ちゃん)

1968年、京都市にて出生

大阪外国語大学Ⅱ部中国語学科卒業

現在、大阪府東大阪市在住

著書

詩集『民族と人間とサラム』(新幹社)

詩集『マウムソリ -心の声-』(新幹社)

詩集『闊歩する在日』(新幹社)

丁章さんの詩集(第3集まで発刊)は  
聖公会生野センターでも取り扱っています。

齊藤 壹

生野地域に「生野地域活動協議会」(略して地活協)という組織がある。この地域に所在する日本基督教団、在日大韓基督教会、カトリック教会、日本聖公会が所属している。1970年代の初頭、生野区の小・中学校がとても荒れていた時代に、青少年に豊かな文化を紹介しようと「生野区民クリスマス」を立ち上げたことから、教派を超えた活動が始まったと聞く。区民クリスマスも昨年で33回目を迎え、生野区の全小学校での開催を達成した。1週間前にその地域にポスターを貼り、前日には校門前でビラを配る。映画、音楽、手品、歌などを楽しむ。かつては800人ぐらいの子どもが集まったことがあったという。少子化とともに参加者も減ったとは言え、

エキジメニズムと生野

毎年110人ほどの子どもたちが集まっていた。今年のクリスマスは朝鮮学校が場所の提供をしてくれる予定で、朝鮮総連系の学校でのクリスマスとは時代も変わってきたものだ。こんなかたちでの地道な南北交流も生野地域ならではの事。

地活協は、「区民クリスマス」以外では機関紙「つながり」を発行し、各教会持ち回りで、教会一致祈祷会、もちつき大会、ソフトボール大会(朝鮮中級学校が場所提供)が、夏には「つながりキャンプ」が行なわれている。今年のキャンプは韓国のソウルYMCA少年探検隊13人が合流し、国際交流の子ども版の開催となった。「つながりキャンプ」参加者の大半は在日で、知っている片言の単語を使ってコミュニケーションを図り、大いに刺激になったと思う。生野はおもしろい。

(さいとう はじめ)

●「被差別部落」の件で。

岐阜市の私立女子高校在職中のある時、担任した学級に2人の韓国人が居ました。日本名を名乗っていて、一人は帰化しており、もう一人は「関西の韓国人居住地の中でも、同じ韓国人たちから差別を受けていた」と話していました。詳しいことは知りませんが、日本の中で二重の

読者の声から

差別を受けていたのだと思いました。ずっと経済的に貧しい生活だったようでした。彼女は一年生途中で、もう一人も2年生途中で学校から去っていきました。もう40歳代になっているはずですが、どこでどうしているのでしょうか？ 幸せであるよう祈るばかりです。(松居 勲)

余韻

■フォトギャラリーにもあるが、韓国の中高生と楽しい1日を過ごした。ソウルでも会ったことがあるので知らない仲ではない。彼女たちはさまざまな理由で家族と共に生活ができずにシェルターに住み、そこから学校に通っている。スタッフの話では「人として、女性として大切にされた経験がないこども達」だ。1世のハルモニ、3、4世の在日の学生、2世の歌手から1日とても歓迎された。なんやかんやいいながらも両親の元で成長した私とは違って、つらい経験をさせられているこども達だ。彼女たちが大切な一人の人として歩んでいくことを大阪から祈りたい。■小泉さんの通信簿「障害福祉編」は筆者の体調不良のため、次号になります。謹んでお詫びいたします。次号にご期待ください。(ピクアンチャ)

聖公会生野センターへのご支援をお願いします

- ◇正会費 年額 1口 5,000円
- ◇後援会費 年額 1口 3,000円
  - ・郵便振込00910-1-321780「聖公会生野センター」
- ◇自由献金・クリスマス献金
  - ・郵便振込 00910-1-321780「聖公会生野センター」
  - ・銀行振込 三菱東京UFJ銀行 東大阪支店  
普通預金 3711311「聖公会生野センター」

発行所：聖公会生野センター

〒544-0003

大阪市生野区小路東1-17-28

TEL06-6754-4356/FAX06-6754-4357

E-mail: ikuno@nssk.org

http://www.nssk.org/province/ikuno

発行人：宇野 徹

編集人：大橋 襄

ウルリムは古紙100%の再生紙を使用しています。